

“農と食” 北の大地から

連載第47回

狂牛病の正式確認から5年
生産現場や原因究明の課題

ルポライター

滝川 康治



ジワジワと増え 明らかな「代用乳 続ける患畜頭数 シロ説」の過ち

5年前に狂牛病の発生で騒ぎになった宗谷管内猿払村の牧場風景。草地酪農が盛んだが、放牧に取りくむ農家はそう多くない(写真右)。患畜の飼い主だった池田毅嘉さんは慰霊碑を建立し、亡き牛たちを弔う(写真左)

仕方ないけど、牛のいない牛舎を見ると寂しくなるときがあるよ:

自宅そばの道路脇に、御影石の小さな慰霊碑があり、「BSE感染にて48頭の乳牛の霊ここに眠る」と刻まれている。

池田さんの牧場では六十二頭の乳牛が疑似患畜に指定された。うち十五頭は試験飼育のため道の畜産試験場(新得町)に送られており、碑は殺処分された残りの牛と患畜を弔うためのものだ。一例目の感染牛が発生した千葉で慰霊碑をつくったことに触発され、〇四年秋に建立した。

石碑の下には牛の名簿が納めてある。「この世に生まれ、用を足し終えて殺されたのなら、まだ浮かべられるだろうに……なんの罪も咎もない、殺された牛たちには、「すまない」と思う」(池田さん)

この病気のせいで人生が変わった。来村した武部農水大臣(当時)と会う、内閣府の食品安全委員会に手紙を出す……。補償を求める裁判の原告にもなった。狂牛病対策のための交付金をめぐる村当局とやり取りも続いている。池田さんの狂牛病問題はまだまだ終わらない。

網走管内佐呂間町で生まれた乳牛が日本では初めて、狂牛病に感染していたと確認されてから5年の歳月が流れた。すでに診断が確定した感染牛は28頭(うち75%は北海道生まれ)に上り、さらに増え続けていく。5年の節目を迎えたいま、患畜が発生した猿払村を訪ねて酪農関係者の話を聞き、感染源の可能性がきわめて高い代用乳を「シロ」としてきた政府見解の矛盾点などを探った。

処分された牛たちを弔う 患畜の飼い主の思い

ホタテで地域再生を果たした歴史がある漁業と七十戸ほどが営む酪農が基幹産業となっている宗谷管内猿払村。人口三千人に満たないこの村で、国内第二例目となる狂牛病(牛海綿状脳症・BSE)の感染牛が確認されたのは二〇〇一年十一月のことだ。当時、市街地にはテレビ局の中継車、患畜の発生農場には報道陣の車がずらりと並び、大騒ぎになった。

この八月下旬、わたしは患畜の飼い主だった元酪農家の池田毅嘉さん(一九三四年、同村生まれ)と会っていた。拙著『狂牛病を追う』(七つ森書館・〇二年)の出版直後に電話をもらったのが縁で訪れて

以来だから、四年ぶりの再会になる。

十三歳から二十八歳で結婚するまで、馬追いや木工場の従業員、造材現場と裸一貫で働いた。結婚後は、弟の離農跡を引き継ぎ、山仕事をしながらの牛飼いの生活。苦勞人である。規模拡大を図るために三十五年前、現在地に移転してきた。

狂牛病問題に遭遇するのは、移転からちょうど三十年たったときである。当時、娘婿夫婦に酪農経営を譲っていたものの、池田さんは搾乳やトラクター作業など第一線で働いていた。が、この問題をきっかけに〇二年春、若夫婦は離農し、網走管内でふたたび酪農に従事する道を選じた。地元に残った池田さん夫婦は、農地を他の農家に貸し、さまざまな始末を余儀なくされる生活が続いてきた。

「自分が原因であの病気になるならば



感染牛の確認きっかけに ネットワークを広げる

「感染牛の初確認から五年たち」酪農業界自体にそう変化はないけれど、僕はこの問題がきっかけで大きなつながりができた。今後はどんな人の発言やネットワークが大きくなるかでしょう」

と力を込めるのは、十七年前に猿払村へ移り住み、放牧酪農に取りくんできた小泉浩さん(64年、埼玉県生まれ)。五十ヘクタールの農地に七十頭ほどの乳牛(うち経産牛は40頭)を飼い、妻と二人で酪農経営を切り盛りする。

猿払での狂牛病の発生を受けて〇一年暮れ、酪農家仲間と「宗谷BSEを考

る会」をつくった。消費者団体との懇談や疑似患畜の見直しなどに取りくんだが、会の活動自体は短期間で終息。当時の小泉さんは、「配合飼料の中身のしつかりしたものを使う」「良質の牧草を作ろう」「代用乳をやめて子牛を育てよう」の三つを提唱し、地元の農協青年部の集まりで話し合う経験も積んだ。

この問題は、多くの人と出会い、ネットワークを広げるきっかけになった。

三年前、北海道スローフード・フレンズ(湯浅優子代表)の会員になり、昨年からは道北の地域リーダー代表も務める。「スローフードの取りくみは」BSEを正面から捉えて消費者などに伝えるのではなく、情感に訴えながらもの考える活動と位置づけている(小泉さん)



「食の安全・安心条例」に対し意見を述べる小泉浩さん(04年夏、上川庁で)

本業のほうでは、ずっと放牧をやってきた。草地面積にマッチした適正規模の酪農を心がけ、入植からこれまで牛の頭数や生産乳量は増やさず、子牛には代用乳を与えず生乳で育てている。

最近、道北の酪農家や行政職員、メーカー関係者ら二十人ほどで「天北放牧ネット」を設立した会長は小泉さん。自然と酪農との共存をめざし、放牧技術の発信や新規就農へのサポートなどをやっているのが目的である。

九月中旬には、関係者が一堂に会し、「いま、なぜ放牧なのか」をテーマにしたセミナーを猿払村で開催する。濃厚飼料や飼養頭数の削減、放牧などに取組み農家に助成金を交付する新事業(6月号「生乳の生産調整が問うもの」参照)を導入した農水省の幹部の講演を通じ、放牧

の意義について共通認識を持つこともセミナーの大きな目的だという。

「農家がこうした催しをやることは、BSEがなければどうも考えられなかった。日本は一つの事件では大きく変わらないう国ですが、僕には絶望感よりも希望のほうが多いんですよ」

と、小泉さんは確かな手応えを感じている。狂牛病の発生を受け、酪農のあり方を見つめ直し、真摯に物事を考える人が増えていることが心強かった。

患者の75%は北海道生まれ 二つの集中感染が鮮明に

日本の狂牛病の感染源と感染経路はいまだ特定されていない。

猿払での発生直後の〇一年十二月、農水省の担当者は稚内市内での説明会の席上、「我が国のBSE発生は七〜十頭と推測される」との文書を配布した。政府御用達の学者の試算に基づくものだ。が、すでに二十八頭の感染牛が確認され、今後はジワジワと増え続けていくだろう。

役人や学者先生の「推測」や「試算」ほどいい加減なものはないことが、ここでも証明された。

感染源などを検証するために、別表に診断が確定した牛たちの出生年月・地、子牛のときに与えた飼料(代用乳と人工



多くの感染牛に与えていた全農系メーカーが製造した代用乳。原材料の牛脂が感染源の可能性が大きくなってきた

(13頭)「一九九一年〜二〇〇〇年生まれ(12頭)」という感染集団があることが鮮明になってきた。後者にはこれから屠殺される個体も残っている。感染牛は今後も増え続け、清浄化への道のりはまだ遠い。この二つの感染集団の存在は、日本の狂牛病の行方を占ううえで、大きな意味を持っている。

共通する飼料は代用乳だけ 原材料の牛脂に深まる疑念

別表で「代用乳」と「人工乳」を特記したのは、子牛のときは、狂牛病の原因物質として有力視されている異常プリオンタンパク質に対する感受性が高くなるからである。哺育期の子牛は、母牛の初乳に含まれる免疫グロブリンなどのタンパク質をアミノ酸に分解せず、腸管粘

膜からそのまま体内に取り込む(この作用は月齢とともに急速に低下する)。汚染された飼料から感染するリスクが大きい時期なのだ。

酪農家には売れるほど生乳があるのに、子牛に飲ませるミルク状の飼料の筆頭格は「代用乳」である。脱脂粉乳を主原料にホエー(乳清)タンパクや油脂類、ブドウ糖などを配合して造った粉末または顆粒状の飼料で、人間のミルクと同様にお湯に溶かして飲ませる。酪農関係者によると「八〜九割の農場が使っているはず」といい、前出の小泉さんのような農家は少数派だ。

「人工乳」は、穀物や粕類、油脂類などをベレット状または粉末に加工した子牛の離乳食。代用乳と併用したりしながら、三か月程度与える。

二十八頭に共通する飼料は代用乳だけ

乳についてまとめた。

網目をかけた二十頭(全体の75%)が北海道生まれで、全道各地に広がりを見せる。北海道は、全国の乳牛の半数が飼養されている「酪農王国」とはいえ、感染牛の偏在ぶりが際立つ。

二十四カ月齢以上の死亡牛の全頭検査が〇四年度から実施されたことで、狂牛病の死亡牛が七頭見つかった。それ以前に死亡牛の検査がきちんと行なわれていれば、もっと頭数が多くなっていた、と断言してもいいだろう。

二十二年目の根室管内別海町の死亡牛には、無謀にも子牛のころから肉骨粉や血粉を使ったサプリメントを与えていた。九六年から〇一年までに道内の農家十九戸が千五百頭あまりの牛に「肉骨粉類を食べさせた」と申告しており、この牛はそのうちの二頭。当該牛は今年四月現在、三百五十頭ほど生存している。道産の肉骨粉類と感染との因果関係を結論づけるには、今後の検査結果を見届ける必要がある。

さらに、「一九九五年〜九六年生まれ

■日本国内での狂牛病の確定状況(2006年9月1日現在。道農政資料などを基に作成)

確定数	生年月	月齢	出生地	代用乳	人工乳	備考
1	1996.3	65	佐呂間町	○	○	
2	1996.4	67	猿払村	○	○	
3	1996.3	68	群馬県	○	○	
4	1996.3	73	音別町	○	×	
5	1995.12	80	神奈川県	○	○	
6	1996.2	83	標茶町	○	○	
7	1996.3	81	網走市	○	○	
8	2001.10	23	栃木県	○	○	乳用去勢
9	2002.1	21	兵庫県	○	○	乳用去勢
10	1996.3	95	神奈川県	○	×	
11	1996.4	94	標茶町	○	○	死亡牛
12	1999.7	62	熊本県	○	○	
13	1996.2	103	士幌町	○	○	
14	2000.10	48	鹿追町	○	×	死亡牛
15	1996.8	102	本別町	○	×	死亡牛
16	1996.3	108	天塩町	○	○	
17	2000.9	54	音更町	○	×	死亡牛
18	1999.8	68	砂川市	○	○	
19	1996.4	109	別海町	○	○	
20	2000.8	57	鹿追町	○	×	
21	2000.2	69	千歳市	○	×	死亡牛
22	2000.9	64	別海町	○	○	肉骨粉など給与・死亡牛
23	2000.7	68	中川町	○	○	
24	1992.2	180	長崎県	○	○	黒毛和種肉用繁殖
25	2000.4	71	枝幸町	○	○	
26	2000.8	68	今金町	○	×	死亡牛
27	2000.8	68	豊頃町	○	×	死亡牛
28	1999.11	80	幌延町	○	×	

※「代用乳」の製造元の約8割は全農系の科学飼料研究所高崎工場。「乳用去勢」と黒毛和種を除く25頭は乳用種牛。「死亡牛」8頭は死亡牛検査で確定したもの。28頭のうち21頭は北海道生まれ。

である。その八割強までは、群馬県高崎市にある全農系の科学飼料研究所が製造し、各経済連(道内はホクレン)を通じて販売されたものだ。注II同工場製の代用乳の全国シェアは20%程度。同社を含むどの製造工場も代用乳への肉骨粉の配合を否定しており、農家側も前出の一例を除くと「肉骨粉類は与えず」と答えている。

一方の人工乳は、全体の三分の一は与えておらず、二つの集団に共通する飼料ではない。この結果「感染源は哺育期に飲ませた代用乳」という可能性がきわめて大きくなってきた。

代用乳の原材料の何が感染源としての疑いが濃厚なのか。このシリーズのなかでわたしたちは、畜産システム研究会(<http://home.hiroshimac.ac.jp/yiva/>)の代表・三谷克之輔さん(広島大学大学院教授)による

「BSE疫学検討チーム」(座長II山内一也(勸日本生物科学研究所主任研究員)は〇三年九月、狂牛病と代用乳の関係について、十分な検証作業をせずに、「感染経路として結びつけることは難しい」と決めつける報告書を発表した。その一方で、牛用配合飼料の製造・配送過程での肉骨粉の混入については、やはり検証不足にもかかわらず、「交差汚染により感染が起きた可能性が高い」と強引に結論づけた。不十分な調査に基づいた政治的な結論だが、未だ修正されず、代用乳シロ

「オランダの飼料工場が製造した粉末の油脂半由來は、一般的なレンダリング(注II食肉以外の臓器や骨などを圧力釜で煮て、脂肪と肉骨粉に分離すること)由来の製品の可能性が高い。日本での発生状況は、不純物の混入割合が高い製造ロットの原料がBSEに汚染された可能性を示している」

旨の指摘を紹介し、オランダ産の牛脂が九五〜九六年生まれの十数頭の集中感染の原因ではないか、と推察した(05年8

月号)「狂牛病対策の現在(参照)。疑念はますます深まるばかりだ。それから一年、「一九九一年〜二〇〇〇年生まれ」の集中感染がより鮮明になった。この集団(12頭)に与えた代用乳の製造メーカーは、科学飼料研究所がもっとも多く八例、全酪連が三例、日清製粉が二例。牛脂ほか原材料の生産国や輸入状況、代用乳の製造時期など重要な情報は公表されていない。政府や自治体は、動物性飼料の出身を詳しく調べ、実態をすべて公開すべきだ。

「代用乳シロ説」は間違い 牛脂を中心に徹底検証を

る「リスク管理型研究」の一環として、八例目以降の感染源と感染経路について疫学的な検討などを進めている。研究に携わるのは、かつて「感染牛は七十頭程度」と誤った予測を示した、東大の吉川泰弘教授（食品安全委プリオン調査会座長）を代表とするチーム。「代用乳シロ説」をまとめた山内氏もメンバーに入っている。

食肉処理や医療面にも課題 生産の仕組みを問い直そう

「代用乳の原材料の動物性油脂については（感染源としての）蓋然性を否定できず、議論は避けて通れない」（農水省畜水産安全管理課の話）

と、農水省はようやく重い腰を上げ、代用乳の本格検証に臨む姿勢を示す。

政府は、牛脂や血漿タンパクが汚染された可能性を探るため、原材料の純度や製造手順、輸入ルート、代用乳の製造時期と量などについて、国内外の当該メーカーに徹底した情報提供を求め、詳しい調査結果を国民に公表すべきだ。複雑な発生予測を行なった吉川氏と「代用乳シロ説」を牽引した山内氏には、自らの過ちを詫び、真面目な検証作業をしてもらいたい。

「狂牛病の集中地域」の汚名を晴らすためにも、強く政府に働きかけるべきだ。

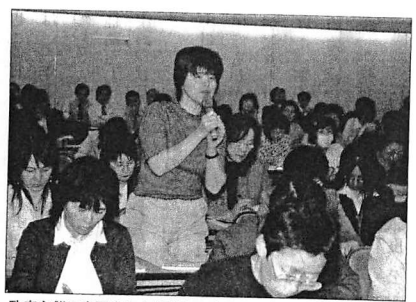
飼育する牛の月齢が不明。肉骨粉を与えた鶏の糞を牛の飼料にしている。狂牛病の検査頭数が少ない。成長ホルモン剤を投与した牛が多数いる。アメリカ産牛肉の輸入問題を通じて、同国の生産現場や検査態勢などがいかに杜撰であるか、多くの国民の知るところになった。牛の生産履歴が記録され、全頭検査を行ない、飼料規制もなされた日本は、アメリカに比べるとよほどはいい。

が、まだ課題は残されている。

厚生労働省は六月、屠場でのピッキング（注）屠殺後の牛の足の跳ね上がりを防ぐため、頭部に開けた穴にワイヤーを挿入し、脳や脊髄を破壊する工程（注）を中止した施設が全体の四九％にとどまっていると発表した。全頭検査で陽性の牛の肉は排除されるが、食肉処理間際まで狂牛病が進行した牛が検出処理される可能性は残っているわけだ。

道食品衛生課によると、道内には十二の屠場があり、現時点でピッキングを続けているところは三施設という（注）来年度中には全施設で中止される予定）。

処理頭数では、全体の一〇数％で特定危険部位による枝肉汚染の可能性が残っている。道民一人ひとりが、こうした事実にも目を向けることが大切ではないだろうか。



政府主催の米国産牛肉問題をめぐる意見交換会では、輸入再開に反対する意見が相次いだ（6月5日、札幌市内で）

狂牛病の人間版とされる変異型ヤコブ病の潜伏期間は、従来考えられていたより長く、五十年を超える可能性がある。との研究結果が今年夏、イギリスの研究チームによって発表された（農業情報研究所のHP：www.juno.dti.nipj.kitaha/index.html）を参照。事実ならば、将来、多数の変異型ヤコブ病患者が発生するおそれがある。手術や輸血を通した潜在的な感染者からの伝播についても、きちんと考えるべきではないか。この問題では、元医療従事者の女性（関東在住）が発信する「BSE&食と感染症つばやきブログ」(<http://blog.goo.ne.jp/infectionk2>)が参考になる。

◆

「英国の風土病だったこの病気を世界中に蔓延させたのは、適正規模を超えて頭数を増やし、効率を上げるために、牛たちを牛乳製造装置として酷使し、高タンパク・高脂肪の動物性飼料まで与えた生産構造が背景にある」

わたしは繰り返して書いてきた。だから、中間のシステムをいじり直すよりも、牛たちの健康を軽視した飼い方を見直し、生産構造のひずみを正していくほうが社会的なコストがかからず、環境とも調和できる根本的な対策になる——とも考えている。

佐呂間町で生まれた乳牛が日本では初の感染牛と確認されて五年が経過した。生産構造の見直しは遅々として進まないが、放牧の復活や有機酪農の取りくみなど希望が持てる動きもある。昨年、家畜福祉についての国際的なガイドラインが策定され、引き続き飼育管理の基準づくりに向けた作業も進んでいる。狂牛病など発生しようもない「酪農王国・北海道」を創り、健康で幸せな牛たちから安心できる食品を生産してもらうために何ができるか——五年を節目に一人ひとりがじっくり考えてみてはどうだろうか。

また、狂牛病の日本上陸が確認された当時、全頭検査の実施や積極的な情報公開を唱え、次々に先駆的な施策を講じた北海道庁だったが、いまは「原因究明は国のやること」（畜産振興課の幹部）と受け身で、前向きな姿勢が感じられない。

「狂牛病の集中地域」の汚名を晴らすためにも、強く政府に働きかけるべきだ。

飼育する牛の月齢が不明。肉骨粉を与えた鶏の糞を牛の飼料にしている。狂牛病の検査頭数が少ない。成長ホルモン剤を投与した牛が多数いる。アメリカ産牛肉の輸入問題を通じて、同国の生産現場や検査態勢などがいかに杜撰であるか、多くの国民の知るところになった。牛の生産履歴が記録され、全頭検査を行ない、飼料規制もなされた日本は、アメリカに比べるとよほどはいい。

が、まだ課題は残されている。

厚生労働省は六月、屠場でのピッキング（注）屠殺後の牛の足の跳ね上がりを防ぐため、頭部に開けた穴にワイヤーを挿入し、脳や脊髄を破壊する工程（注）を中止した施設が全体の四九％にとどまっていると発表した。全頭検査で陽性の牛の肉は排除されるが、食肉処理間際まで狂牛病が進行した牛が検出処理される可能性は残っているわけだ。

道食品衛生課によると、道内には十二の屠場があり、現時点でピッキングを続けているところは三施設という（注）来年度中には全施設で中止される予定）。